

会 議 録

☐ 全部記録 ☒ 要点記録

1	会 議 名	第 1 回姫路市文化芸術振興ビジョン検討懇話会
2	開催日時	令和 8 年 7 月 1 6 日（木曜日） 1 5 時 0 0 分～1 6 時 3 0 分
3	開催場所	姫路市役所本庁舎 地下 1 階 B 1 0 2 会議室
4	出席者又は欠席者名	（出席者）姫路市文化芸術振興ビジョン検討懇話会 委員 8 名 （事務局）観光経済局長、国際戦略室長、国際戦略室主幹 他 2 名
5	傍聴の可否及び傍聴人数	傍聴人なし
6	議題又は案件及び結論等	1 会長及び副会長の選出 2 姫路市の文化芸術の現状、国・県の動向について 3 姫路市文化芸術振興ビジョンの改定について
7	会議の全部内容又は進行記録	詳細については別紙参照

事務局	1 開 会 (15:00) 2 委員の紹介 3 議 題 (1) 会長及び副会長の選任 会長：事務局の提案により 古賀 弥生 委員を選任 副会長：会長の指名により 豊城 浩行 委員を選任
事務局	(2) 姫路市の文化芸術の現状、国・県の動向について 【資料 3-1（現行ビジョン実施状況）、資料 3-2（市民・文化団体アンケート調査結果）、資料 4（文化振興を取り巻く国・県の動向）に基づき説明】
会長	国・県の動向については、皆さまも最近の流れはご存知の通りだと思う。文化芸術を育てていく観点と、そこから発生してくる実り、文化芸術が生み出すものの力を、地域や社会で活かしていこうということに関心が高まっている。観光面と文化を結びつけることがイメージしやすいが、もちろん経済的な面だけでなく、例えば障害のある方の活動の促進、地域活性化等、様々な分野に文化芸術の力を活かしていこうという意味合いが広がってきている印象がある。そういった状況も念頭に置きつつ、委員の皆さまから何かご質問等はあるか。
委員	アンケートは、15 歳以上の 3,000 人を無作為抽出したとのことだが、無作為の抽出母体はどこか。
事務局	住民基本台帳からランダムに抽出した。
委員	世代別のばらつきはあるのか。
事務局	無作為抽出なので、この世代から何人とはしていない。
委員	若い人の回答が少なかったと思うが、元の母体の年齢構成が気になるところである。
会長	一般的に見て、アンケートは年齢の高い方の回答が多い傾向がある。60 代以上の回答が 5 割を超えていることを踏まえて見る必要がある。

委員	どうしても若い人の声は、なかなか拾えない。それをどう拾うかが大きな課題だと思う。
事務局	数は少ないが、若い人達の分析も進めているので、第2回の会議でその結果も提示したい。
委員	回答方法は紙媒体だけか。それとも、電子でも取っているのか。
事務局	アンケート用紙を郵送で送り、回答はスマホやパソコンからでもできる仕様にした。結果としては、郵送で返ってくるものが多かった。
委員	戻ってくるアンケートは偏っていることが多いので、取り扱いが難しいと常に思う。
会長	その通りだと思う。アンケート調査は、ビジョンを改正していくに当たっての基礎的な資料として意味があるものだが、やはり限界もある。
事務局	子ども連れで来られるファミリーコンサート等、若い方がたくさん来られるイベントでのアンケートを見ると、そういった場を求めている人が多いと感じる。
会長	確かに、子育て中の方や若い方が参加される催しのアンケートの中で見えてくるものもあると思う。
委員	京都は歴史があるが、学生のまちでもあるので、前衛的なものやコンテンポラリーなもの等、学生のたまり場から文化が醸成されていく傾向があるように思う。漫然とアンケートを取ってしまうと、時間や経済的に余裕のある層の声が多くなる。そこもちろん大切にすべきだが、大学や専門学校等、若い人が集まるところから聴取してもいいのではないか。
委員	以前は、アップライトピアノがある家庭は少なかったが、現在は、幼少期にピアノを習っていた保護者が、自分の子にもと考え、それをきっかけに始める家庭も多いのではないと思う。

委員	コンクールでは、大学などで芸術以外の分野も幅広く学びながら、幼少期から続けてきた音楽活動で優れた成績を収める人が増えていると感じる。音楽を専門とするのではなく、学業や他分野と並行して音楽を続ける人が増加しており、音楽や演劇、歌舞伎など、興味のある分野を追求する価値観も変化していると感じる。
会長	色々な変化が現れてきている。
委員	体験ができない子どもや若者が多いと思う。姫路には誇れるものが多いのに、知らない人が多い。それは、家庭によっても違ってくると思うので、学校での体験が重要ではないか。
会長	国の方向性も、そのあたりを含んでいる。経済的な状況、障害の有無に関係なく、文化芸術に触れられる環境づくりが大切と言われている。
委員	資料５の文化芸術の対象範囲の表を見ると、伝統芸能に加えて、アニメや漫画、ゲーム等、いわゆるポピュラーカルチャーも含まれている。若い人達が普段接しているアニメや漫画等のコンテンツが、文化芸術に含まれていると認識していないのではないかな。それも、アンケートの回答率が低い要因の一つかもしれない。ポピュラーカルチャーも文化芸術だということを、もっと周知していく必要があると思う。
委員	資料３－２の市民アンケートで、文化芸術の鑑賞場所の回答として、１０代から３０代は自宅での割合が高い。これは、インターネットや動画配信、SNSを通して視聴しているという理解で良いのか。
事務局	その通りだと思う。
事務局	現在、市では国際戦略の策定作業を行っている。その中では、クルド人問題、あるいは身近なゴミ問題等、外国人の方々との相互理解の重要性も議論している。外国人との交流のやり方として、文化芸術を活用するという動きはあるか。
会長	兵庫県内では、ピッコロ劇団が行っているワークショップで、外国人住民の方と日本

	人住民の方が一緒に活動している。岐阜県可児市には「可児市文化創造センターala」という文化施設がある。そこの取組は、非常に有名で、仕事のために来日している海外にルーツがある方が多いが、仕事の内容が定型的なものが多く、コミュニティができているので、日本語がそこまで分からなくても支障がない。そのままだと日本人と交流する機会がないので、一緒に舞台芸術の作品を作ることで関わっている。
委員	演劇の世界でも、どのように外国の方とコミュニケーションをとるかは、ずっと課題としてあり、言葉が違う人達とどう関わるかというプログラムは、全国で色々な事例がある。そういうことをリサーチして取り入れることは、あっても良いと思う。
事務局	国でもそのような議論がなされているのか。
会長	文化芸術の力を活用していくことについては、2017年に改正された文化芸術基本法の中にも盛り込まれている。その中の一つに、経済的な状況、国籍、障害の有無に関わらず、文化芸術の実りを享受するというものである。
事務局	今年度、「海の子どもたち」という演劇を公演するが、ノンバーバルで表現されており、言語や障害の垣根を越え、文化芸術を感じることができるのではないかと考えている。また、日本語広場の生徒やボランティアに「海の子どもたち」に参加してもらえれば、一緒に平和について考えられるかもしれないということで、ワークショップの試みも始めている。
会長	良いと思う。どんな現場になるのか楽しみである。次の議題に移る。事務局に説明を求める。
事務局	(4) 姫路市文化芸術振興ビジョンの改定について 【資料5（姫路市文化芸術振興ビジョン改定の考え方について）の説明
会長	先ほど説明のあったアンケート結果や、国や県の動向からだけ発想すると、フォアキャスティングになる。それを全く無視するのではなく、そこだけに捉われず、あるべき未来像からどこにどうやって到達すれば良いかを考えようということである。事務局として、特に各委員から聞きたい意見はあるか。

事務局	バックキャストイングの手法をとっていく中で、具体的な未来像を描く必要がある。基本目標（案）と、それに係る３つの要素について説明した。バックキャストイングで進めていくにあたり、どういった姿・状態になれば、基本目標に近づいたと言えるのか。未来像に向かうにあたり、どういう取組みが必要と思うか。そういった点の意見をいただきたい。
会長	「歴史と文化芸術が紡ぐ心豊かな未来と新たな価値の創造」が基本目標として提示されている。これで決定ではなく、これをたたき台として皆さんの意見をいただきたいということであるが、どうか。
委員	市が市民のために力を入れている行事でも、あまり知られていないものもある。３番目に「誇りを持って」とあるが、誇れるものを知らずに転出してしまう若者もいる。皆が自分の故郷として誇りを持ち、世界に出て行った後に、そのことを他者に伝えられるような教育が必要だと思う。
副会長	文化財は、その土地、育ってきた場所の歴史や文化を物として示している。それを知ることは、自分のアイデンティティになり、外に出て行った時に自らの存在をアプローチするのに必要なものになる。まずは知る機会を皆に与えて、そこからもっと知りたいと思えるようになれば良いと思う。
副会長	「文化芸術」と聞くと敷居が高そうで、自分は関わっていないと思いがちだが、ほとんどの人が関わっている。文化芸術に関わっていますかと聞かれた時に、若い人達が「私はこれに関わっています」と言ってもらえるようになれば、それだけでも文化芸術の振興になるのではないか。関わっている文化芸術を誇れるような施策を進めてほしい。
委員	灘のけんか祭りは有名だが、祇園祭に負けないくらいすごいイベントである。若い人達が好む好まざるに関わらず、参加している。あれも大きな姫路の文化の一つである。そういった文化を継承してくには、「あなたたち若者が必要なんだ」ということを伝えられれば良いと思う。
委員	策定作業を進めていく上で、資料の中にある「本質的価値を享受できる」という文言

事務局	を、もう少し具体的に表現した方がよいのではないかと思います。また、若者に届く情報発信のあり方を考えてみるのも良いのではないかと。 資料5で、基本目標案として、3つの文言で表現しているが、下の2つは、文化芸術の力を活かして社会的・経済的な問題にも波及させていく視点を表現しており、その前段として、まず文化芸術そのものを体験できる、触れ合えるという部分を「本質的な価値」と表現したものである。言葉の使い方については、今後も検討したい。
委員	姫路市内には約400の文化芸術団体があり、今回のアンケートにはその半数程度が回答している。団体にはさまざまなジャンルがあるが、文化・文芸関係の団体も多く、一方で、文学に関心を持つ若い人は少なくなっている。文化芸術団体の構成員も高齢化が進み、若い世代の新規加入が少ない中、今後5～10年のうちに活動の継続が困難となる団体が増えることが懸念される。若い世代にどのように継承し、活動を存続させていくか、特に、若い世代への情報発信や参加促進が重要であると考えます。
委員	KPIを設定する際には、イベントの参加者数や文化団体の構成人数だけでなく、参加者の年齢や世代構成といった指標も加えてはどうかと思う。高齢者だけでなく若い世代の参加を増やすことで、文化芸術活動の裾野を広げていく必要があるのではないかと。
委員	団体の存続については、考えさせられることが多い。興味を持つ理由は人それぞれで、内容は分からなかったようであるが、初めて見た狂言にとっても興味を持った子もいた。その空気に触れることで感動し、きっかけとなることがあると思うので、連れて行くことが非常に重要だと思う。
委員	芸術を楽しむには、一定の教養や知識が必要となる場合があるが、知識がない人にも楽しんでもらうためには、発信する側が分かりやすく伝える工夫をすることが重要である。その取組みとして、能の解説漫画を制作したり、「スマート能」を始めたりした。作品の背景や登場人物を知ることで、観劇への関心を高めることができる。基本的な知識がないのであれば、まずは知ってもらうための情報を届けることが重要である。
委員	演者自身の魅力を発信することも、芸能への関心を高める方法の一つであると思う。能面の下には若く魅力的な能楽師がおり、若手能楽師を応援するファンが増えれば、能

	を見に来る人の増加にもつながるのではないかと考えている。
委員	芸術文化の普及には時間がかかるため、今できることを一つずつ積み重ねていくことが重要である。より多くの人に知ってもらうため、伝え方を工夫しながら取組みを進めている。
委員	「初めて」という敷居を低くするには、既に知っている人が誘い、知らない人と一緒に参加するような関係づくりも有効である。分野を越えた横のつながりを活用しながら、互いの取組みや意見を共有し、各分野で応用していくことが重要ではないか。
委員	劇場を拠点に、長年アートマネジメントに携わってきた。これまで、劇場での体験を、日常とは異なる特別な時間や晴れの場として捉え、おしゃれをして劇場に足を運び、非日常を楽しむ魅力を伝えてきた。こうした特別な体験は大切であると考えてるが、一方、文化芸術が「特別な人だけが関わるもの」と受け止められ、身近なものとして捉えられていない現状がある。
委員	アクリエひめじは2,000人規模の集客が可能であるが、逆を言えば、姫路市全体の人口から考えると、劇場体験をした人はごく一部であり、より多くの市民に文化芸術を身近に感じてもらうための工夫が必要である。
委員	文化芸術に触れる機会が届いていない人のもとへ出向くアウトリーチの取組み、また、劇場側から市民を受け入れるインリーチの取組みが大切であると考えてる。幅広い市民が文化芸術を当たり前のものとして享受できる環境づくりが重要である。
委員	「歴史と文化芸術が紡ぐ心豊かな未来と新たな価値の創造」という基本目標については、歴史ある城下町としての積み重ねや祭りなど、姫路が持つ豊かな歴史・文化を生かすことができる一方で、既存のコミュニティや価値観を強調しすぎると、そこに属さない人々を排除することにつながる危険性もある。歴史や伝統に基づくつながりが、閉鎖的で固いコミュニティとして受け止められないよう注意が必要である。
委員	新たな価値観は、既存の価値観を壊したり、塗り替えたりしながら形成されるものであり、歴史の重みを尊重しつつ、新たな価値を創造していくことは容易ではない。新し

	い文化や価値観は、当初は少数者から生まれるので、特殊なものとして受け入れにくいものと見られる場合もある。多様な価値観を受け入れる土壌をつくるとともに、姫路の歴史や文化の背景をしっかりと認識していくことが重要である。
委員	神戸は、明治以降の町で、破壊と再生を繰り返していると聞く。新しさゆえの心地良さもある反面、弱さみたいなものも感じる。姫路に来ると、歴史的な背景があり独特の積み重ね方を感じる。偏り過ぎるとそこから排除されていく感覚になる人も出てくると思うので、上手くバランスがとれると、とても良いビジョンになるのではないかなと思う。
会長	一通り意見をお聞きして、事務局が提示している基本目標の内容については、大きな違和感を持った方はいないと思ったが、いかがか。
副会長	「新たな価値」と言ってしまうと、今までのものとは違う、今までのものは置いておいてという感じになってしまう。今までの価値を理解した上で、それをより膨らませるという感じを出せればよいのではないかなと思う。
会長	今まで紡いできたものの延長線上、その土台の上に新しいものが乗っていくということだと思う。基本目標に対する受け止め方に加えて、日頃感じている姫路の歴史も含めた文化芸術の現状と課題等、具体的なところの意見をたくさんいただけたと思う。事務局としては、何かあるか。
事務局	基本目標としては、「新たな価値」という表現を削除し、「歴史と文化芸術が紡ぐ心豊かな未来の創造」としてはどうかと考える。「心豊かな未来」は、皆が追い求めたいすごく大きなもので、「新たな価値の創出」は、それを実現するための手法ではないかなと思うので、施策の柱以降の部分で検討していきたい。
委員	ピアノを習っている子もいるし、ジュニアオーケストラに入っている子もいる。皆が同じものを好きになる必要は全くなく、同じことをする必要も全くない。一つ一つの文化を大切に、子ども達がそれを享受し、地域で育っていくことが大切だと思う。
会長	今回は、ビジョンの中身の一步手前の基本目標を中心に意見をいただいた。皆さまからいただいた意見は、次回以降の審議内容の参考にさせていただく。会議の回数は限ら

れているが、皆さんから学ばせていただくことも多く、このような感じで意見交換を重ねることができれば、良いビジョンが作れると思う。進行を事務局にお返しする。

4 閉会